

## 私の戦中戦後

山梨県 生山祐夫

私は大正十一（一九二二）年八月八日、山梨県北巨摩郡穴山村石水一九七九番地に八人兄弟の五番目として生まれました。我が家は稲倉郷の郷社である稲見神社の神官である生山大隈守の子孫の名家で、父秀雄は小学校校長、村長、農業協同組合長などを勤めました。

学歴は穴山尋常高等小学校高等科を卒業、次いで同村の青年学校を卒業しました。軍歴は昭和十八（一九四三）年一月十日、海軍横須賀海兵団に入団、同年五月、航空母艦「翔鶴」に機関兵とし

て乗艦しました。

「翔鶴」は二五、〇〇〇トン級で、全長二百五十メートル、速力三十五ノット、搭載飛行機八四機、日米開戦直前の昭和十六年八月進水の最新鋭の航空母艦です。この新鋭艦の乗員となりたることに名誉と、しっかりやらねばとの責任を強く感じ緊張したことを思い出しています。南太平洋方面に出撃しましたが「翔鶴」の戦歴については、ハワイ海戦に機動部隊（長官 南雲中将）第五航空戦隊に「瑞鶴」と共に参加し、多大の成果を上げたとの証しを聞いて、一層精励すべきだと深く肝に命じたことを今更のごとく思い出され、感慨ひとしおです。

その後の私の軍歴は、

昭和十八年十月、海軍工機学校入校のため「翔鶴」を降艦。学校所在地は横須賀市稲岡町。

昭和十八年十月、海軍工機学校電気術科入学。

昭和十九年二月、海軍工機学校卒業。

昭和十九年二月、父島海軍通信隊に配属。

昭和十九年八月、父島海軍根拠地隊に転属。

昭和二十一年二月、浦賀ドックに上陸、復員。

昭和十九年二月、第三艦隊第一航空戦隊で「翔鶴」に乗艦、マーシャル群島に出撃の後、トラツク島に帰還しました。第三艦隊第一航空戦隊が瀬戸内海で「月月火水木金金」の二カ月間の猛訓練の上、父島に向かう途次、別府のホテルに宿泊しました。

大きなホテルで海軍が全館を貸切り、慰問団が見え、歌に踊りに数時間をすごしました。歌手の名前は忘れましたが、リクエストが求められ、「誰か故郷を想はざる」に決り、歌手が歌い、乗員も合唱すること数回、皆涙して号泣しました。戦地に赴く兵、海軍であるから艦と運命を共にするを

思い、慰問団一同及びホテル従業員の多くも心から涙してくれたものと思い、今でもその時の情景が目に浮かびます。若き日の感激の一コマでした。南方戦線に出撃した多くの戦友は敵潜水艦にやられて戦死しました。

戦後、昭和二十一年五月、関東電気工事株式会社。昭和二十五年五月、山梨県甲府市山宮において天皇、皇后両陛下の行幸啓の下で植樹祭があり、両陛下、従者、甲府市湯村にある常盤ホテルに御宿泊された。私は停電等を考慮して県から派遣される光栄に預かりました。常盤ホテルは皇室御用達の由緒あるホテルです。

昭和三十二年、関電工を退職、山梨県企業局電気課職員となり、県営奈良田発電所の建設事務所に配属されました。

昭和三十五年、県営野呂川発電所建設事務所に配属され、昭和三十八年工事は完了しました。引き続き発電機運転に従事しました。

昭和四十二年、御坂トンネル建設事務所に転勤、

その後三年間勤務しました。昭和四十五年、県営  
笛吹川発電所に勤務。昭和五十二年、山梨県庁を  
退職。

従来、生地の穴山に農地があり、桃、リンゴの  
果物、野菜を栽培していました。甲府より西方二  
十キロの地で、雨天を除き家内と共に私の運転す  
る車で行き、農作業に励んでいる次第で、健康に  
恵まれているから出来る幸せであります。

## 護衛艦隊勤務を回顧して

佐賀県 國 廣 初 男

私は海軍の少年兵志願者で、当時の家庭は父、  
母、私、弟三人、妹二人の八人家族で私は長男で  
した。家業は漁業で「かき」の養殖業でした。戦  
後は海苔の養殖が主体となり、副業として玉ねぎ  
と米作をやっております。学校は鹿島村立尋常高  
等小学校の高等科を卒業し、十五歳になって海軍  
を志願しました。その時、鹿島村からは五十人も  
志願者がいました。

佐世保第一海兵団で受験の結果、六十点以上の  
成績だったので合格となり、続いて適性検査があ  
りました。私は第一希望を少年航空兵に、第二希  
望を少年通信兵を指定しましたが、検査の結果、  
少年通信兵に合格しました。

昭和十九（一九四四）年二月五日、山口県の防  
府海軍通信学校に入校、第七十期普通科練習生と